

1. はじめに ～現地調査参加の目的

このたびの「マレーシア海外教育旅行現地調査」では、本校における「異文化理解の深化」として、国際的な生徒との交流や海外における体験的な活動を軸としての海外教育旅行が可能かどうかを調査することを目的に参加させていただきました。

本校の国際理解教育の課題は「学習活動の一貫性を持たず単発性であること」にあります。その解決策として、たとえば、国際理解教育と本校の環境教育、キャリア教育やシティズンシップ教育を連動させ、教育課程において各教科との融合性や総合的な学習の時間での系統立てた学習活動を構築したいと思っています。その学習活動の中に海外教育旅行を導入できないかを検討したいと考えています。

2. 現地調査の概要と海外教育旅行実施にあたっての課題

現地調査の旅程と訪問地・視察地の概要から、本校で海外見学旅行を企画・計画する場合の課題点を検討していきます（以下では「クアラルンプール」を「KL」とします）。

【実施時期、日程、移動手段・手続き】

1) 実施時期

本校の見学旅行は10月中旬～下旬で例年設定しています。マレーシアへの海外教育旅行を計画する場合、10月という時期があっているのかを検証する必要があります。たとえば、学校訪問などの学校交流やホームステイ、B&Sプログラムの実施が可能なのかどうかの調整や学習テーマの設定などの検討が必要であると思います。

2) 実施日程の設定

本校の旅行地は関西・首都圏の4泊5日で設定しています。今回の教育旅行現地調査での3泊5日（機内泊1日）では、実質4日間を確保できる点から、国内見学旅行と研修日程は大きな差異はないと思われます。ただし、KL以外の見学地（マラッカなどの）訪問や宿泊を伴うホームステイの実施などを組み入れると実質5日間となるような日程設定が必要であると考えます。

3) 移動手段・入国審査など

本校規模（1学年320名）の学校が海外見学旅行を企画・計画するにあたって、移動手段は重要な検討課題になります。今年度の本校の見学旅行では、羽田経由の2団で移動します。海外見学旅行で320名を輸送する場合は、航空機の定員や経由地などから、2団による移動、さらに1日日程をずらすなどして旅行日程を検討する必要があります。

入国審査ではKLIAでのかなりの混雑が見られました。入国審査自体も旅行経験の一つではありますが、入国審査の際には、見学旅行（団体専用）レーンの設定などの工夫があればいいなと感じました。

【宿泊ホテル、食事・衛生面、健康管理・医療機関】

1) 宿泊ホテル

宿泊した2つのホテル (Seri Pacific Hotel KL/Renaissance KL Hotel) は国内の見学旅行での宿泊ホテルと同等 (それ以上) のクオリティであると思いました。アメニティも整っており、日本からの持ち込みを考える必要はないほどありません。電源コンセントは日本とは違いますが、アダプターは各ホテルの貸し出しがあり、(特に高校生が心配する) スマートフォンなどの使用上に問題はないようです。またフリーのWIFI環境も整っています (海外設定しなければ帰国後に膨大な料金の支払いの可能性があり注意が必要)。Renaissance KL Hotelには日本人スタッフも常駐しており、日本語でのコミュニケーションは心配ありません。また、両ホテルとも片言の英語でもコミュニケーションがとれるので、気兼ねなく英語を発することができると思います。

2) 食事・衛生面

ホテルの食事は、マレーシアの一般的な朝食のほかに、通常の日国内ホテルで提供されるような食事もありメニューが豊富でした。また、昼食、夕食で案内していただいたレストランも、高校生が満足するような食事内容だと思います。ニョニャ料理をはじめ、中華料理、マレー料理、インド料理を楽しむことができ、また、客家飯店のオープンテラスから見るKLの夜景や、サロマ・シアターで郷土芸能を楽しむことができるのも、多民族の国であるマレーシアを体感できるものとしての満足度は高いと思います。

ただし、アレルギーを持つ生徒が増えてきており、食事の内容について、事前に食材リストを提示してもらうなど、あらかじめアレルギー対策をとる必要であると思います。

3) 健康管理・医療機関

医療機関への搬送マニュアルを準備しておくことが必要だと思います。日本とは違う環境の中で、急病が発生した場合の段取りは、保護者が関心を持つ内容でもあります。日本人スタッフがいる医療機関 (個別ケースの場合は診療科など) のリストアップと対応の仕方などを確認しておくことが必要であると考えられます。

【研修・学習内容、見学地・自主研修の設定など】

1) 上級学校訪問・大学生との交流

マレーシアの最高学府であるマラヤ大学、日本型の工学系教育を行うマレーシア日本国際工科院の2つの大学を訪問させていただきました。2大学の訪問では、高校生と学生との交流学习の期待、研究室訪問等の学問的交流を検討、文化的資源との接触など、有意義な学習活動が実施できることを確認できました。実施に向けて、たとえば、学問的交流や研究室訪問で「学問的な興味・関心を明確にし、それに向け何を取り組まなければならないのか」といった課題設定を、事前学習として (高校の教育課程や教科指導に組み込んで) 十分に行なう必要があるという課題があります。

英語学校協会 (English Malaysia) とのミーティングでは、「英語がコミュニケーションツールであることを実感・体感できる」ということや、語学留学におけるマレーシアの有効性 (多民族を結ぶツールとしての英語) について紹介していただきました。

今回の調査の目的を「高校生との交流の可能性を模索」を課題設定しました。日本大使館の書記官から、「英語に実践的に接するという目的の交流には、マレーシアの中等教育学校がいい印象を持っていないのではないか」というコメントがあり、英語研修以外での学習目的 (共通の学習テーマの設定) がないようでは、双方の学校が効果的で持続可能な交流をしていくのは難しいのではという印象を受けました。

しかし、英語をコミュニケーションツールとして使うことによる、高校生・大学生との

学習体験的な交流は、限られた時間において有意義な経験になると考えられます。また、生徒の海外留学など、将来海外に目を向けるきっかけづくりになると思います。

2) カンポンビジット

現地の結婚の儀式・披露宴に参列させていただく貴重な経験をさせていただきました。伝統的な風習・文化を体験することは、自分の今の文化的立ち位置を考える（文化を比較による自身の考えを深める）材料になると思います。その意味でも、マレーシアの長閑な風景の中に身を寄せて過ごす時間は、国内教育旅行ではなかなか体験できません。マレーシア政府観光局が認定しているホストファミリーは、英語である程度のコミュニケーションが取れるので受け入れには大きな問題はないと思います。また、ランブータンやヤシの実の収穫、ゴムの採取、バティック体験、地域伝統芸能を地域の人たちと楽しむ体験などのプログラムも充実していました。生徒には、ホスピタリティの視点が考えられるよう、日帰りではなく、宿泊での体験を日程に組み込みたいと思っています。

3) 見学地の設定

マレーシアの政治・文化・宗教を考える視点では、新王宮、国立モスク、ピンクモスク、プトラジャヤのような計画都市の見学を設定できると思います。また、歴史的な背景（イギリス植民地時代、日本の占領時代、戦後のマレーシア）をたどる見学地（国家記念碑、独立広場など）からマレーシアと日本の歴史を対比し、マレーシアの発展を考えるような見学地（KL シティギャラリー、プトラジャヤ）の設定ができると考えました。

バティックギャラリー、チョコレート工場では、バティックは伝統工芸であり、カカオはマレーシアでも産地であることから、マレーシアの文化体験、産業の一端を考える見学地として設定できると思います。また、日本とマレーシアの経済的な結びつきを見せることができる見学地の設定も考えられます。マレーシア政府観光局では、「時期に応じて多様なイベントが開催されており、そのイベントも文化体験として活用できる」というお話もあり、イベントの開催に合わせた見学地の設定も検討できると思います。

4) 自主研修の設定

自主研修としてのKLは、治安面での心配はほとんどなく、また、ショップなどでは辛抱強く言いたいことを親身に聞いてくれる人が多いと感じており、コミュニケーション面でも、大きな心配はないと感じています。研修スポットとして、KLCC、ブッキ・ビンタン、KL 中心部の歴史的建造物など、事前学習で魅力的な見学地があると感じられ、旅行の楽しみにつながると思います。また、コミュニケーションや地理的な不安を少なくするために、B&S プログラムを取り入れることも選択肢の一つだと思います。

また、自主研修を実施する場合は、国内のときと同じように、研修範囲の制約、緊急連絡の手段と方法を決めておく必要があります。たとえば、研修範囲をどこまで広げるのか、非常時対応の本部をどこに置くのか、引率教員の巡回や配置、緊急連絡用の携帯電話・通信手段の確保など、非常時の対応マニュアルを作成する必要があります。

3. 教育旅行としてのマレーシアの有効性

マレーシアの多様性社会の特性や自然環境を理解・体得し、地域に見る国際的な課題と比較し、自国文化が再認識できるよう、グローバルな考え方をもてる生徒の育成を視点とした学習活動の検討することが必要です。ここでは、キャリア教育の連動を軸に「異文化受け入れの準備はできている？」という視点で考えてみました。

【検討した交流プログラム】

1) 異世代間の交流

将来のインバウンド層である、中学生・小学生との交流を検討することができるのではないかと考えました。親日的であるマレーシアの小学生・中学生に、日本の伝統や今を、わかりやすく伝えるかといったコミュニケーションの実践や、日本についてのイメージを逆にインタビューしながら交流していくことが大切なのではないかと思います。

高校生や大学生の交流に目が向きがちですが、中学生・小学生との交流に目を向けるのは、今後のインバウンド増加に対応する異文化理解の受け入れの視点をコミュニティ・ベースとして養えるのではないかと考えたからです。

2) キャリア形成

今回の調査では、マレーシア政府観光局の徳永マネージャーをはじめ、ホテルスタッフ、Air Asia Xの日本人クルー、英語学校スタッフ、マレーシアにかかわる日本の方々に接する機会をいただきました。マレーシアで仕事に就いたきっかけやエピソード、KLでの生活実態などについて生徒に紹介していただく機会をプログラムに加えることができればよいなと思いました。海外で働くことという視点で将来のキャリアを考えるきっかけづくりになると思います。

4. おわりに

今回の現地調査では、KLIAに到着したときの他民族の賑わい、湿潤な熱気の体感、KLの摩天楼が林立する発展や郊外の農村文化の穏やかさ、マレーシアに発展をもたらした歴史的な時空の流れなど、マレーシアのエネルギッシュな興味深い側面をうかがい知ることができました。海外教育旅行において、マレーシアの都市部や農村部と札幌市・北海道との対比で得られる子どもたちの経験は、グローバル人材の育成において有効な視点であり、マレーシアへの海外教育旅行はそれだけでも有意義だと感じました。

すでに海外教育旅行を実施している高校の事例を参考にさせていただきながら、本校ならではの海外教育旅行を企画・計画したいと考えています。まずは、教育活動への位置づけの検討、教育課程や各教科との関連、国際理解教育と環境教育やキャリア教育、シティズンシップ教育との接続など、実施に向けて整理すべき課題が多いです。課題は多いですが、できるだけ早くに課題を整理し、海外教育旅行の実施に向けて校内での働きかけをしていきたいと思っています。

【謝辞】

現地調査では大変密度の濃い内容から、マレーシアのよさを体感でき、海外教育旅行でのマレーシアでの実施の可能性を確認できました。このような素晴らしい機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます。

マレーシア政府観光局の徳永様、現地ガイドのファイズ様、添乗員のH. I. S 石川様・坂梨様には、今回の視察先についてのコーディネートのおすばらしさに感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、現地調査でご一緒させていただきました5名の先生方には旅行中、大変よくしていただき、感謝申し上げます。